第7章

子どもの虐待の裏側 1——子どもへの愛情の否定

幼児虐待が問題になるまで

洋の東西を問わず、昔はどこにでも子どもがたくさんいて、庶民の家庭では、小さい頃から一家の働き手になっていました。しかし、その一方では〝やっかい者〟でもありました。言うまでもありませんが、極度の〝富の偏在〟があったため、ごく一部の富裕層を例外として、今では想像もつかないほど庶民全体が貧しかったからです。江戸時代までのわが国では、特に飢饉や凶作の年の農村部では、〝口減らし〟のために生まれたばかりの子を殺す〝間引き〟と呼ばれる嬰児殺害が流行しました。人口の減少をおそれた各藩は、そうした間引きを禁止するほどだったそうです。

また、わが国には、昔から年季奉公という慣習的な制度がありました。これは、年限があったとはいえ、また、時としてわずかながら選択の余地があったとはいえ、子ども自身の意志とはほとんど無関係に、工場や商店に住み込みで働かされたという意味で、一種の奴隷制度と言えるかもしれません。明治から昭和の初期にかけて、特に地方に住む少年少女の多くは、四年間の、後には六年間の義務教育を終える

copyrighted material

と、口減らしもかねて、すぐにそうした奉公に出されたのです。かつてＮＨＫテレビで放映された連続テレビドラマの中で、主人公の「おしん」は七歳で子守り奉公に出されています。このように、ほとんど義務教育も受けることなく社会に出される子どもたちも現実にいたのです（宮本、一九八四年、七一―七二ページ。山本、一九七二年、一八三ページ）。子ども自身は小遣い銭程度しかもらえませんでしたが、当時は、衣食住が保障されるだけでもありがたがられたのです。そのうえ、工員の場合には技術が身につきましたし、商店に奉公する丁稚の場合には、成績がよければ〝暖簾（のれん）分け〟と呼ばれる、独立の道が与えられることもありました。

学校教育について言えば、第二次大戦終結までは、義務教育だけで社会に出される子どもたちがほとんどでした。旧制中学校や高等女学校や師範学校などの上級学校に進学する子どもは、非常に少なかったわけです。ましてや、旧制高校や旧制大学で高等教育を受ける者は、ごく少数の裕福な家庭の子弟に限られていました。

若い女性たちにも過酷な運命が待ち受けていました。驚くべきことに、昭和に入っても、まだ人身売買類似の行為が見られたのです。[註1] 昭和六年（一九三一年）に、東北六県を冷害が襲った時、山形県のある村では、一五歳から二四歳までの女性四六七名のうち、一一〇名（二四パーセント弱）もが〝身売り〟に出されています。そして、昭和八年に児童虐待防止法が制定されたにもかかわらず、昭和九年の冷害の年は、さらに数多くの少女たちが売られていったのです。今では想像すら難しいかもしれませんが、「かわいい」などと言っていられないほど、地域社会全体が困窮していたわけです。言葉を換えれば、かわいがれるだけの経済的余裕がなかったために、「かわいい子には旅をさせよ」という戒めの言葉を地で行くような態度を、どの親も取らざるをえなかったということです。

恋愛なども、自由にできるようになったのはごく最近のことで、エドワード・モースの日本滞在日記によれば、江戸時代のなごりが色濃く残る明治初年には、男女が知り合う機会そのものがほとんどなかったようです。また、特に女性たちに対しては過酷な扱いをする文化圏が多く、中近東の国々では、今でも恋愛が禁止され、それが発覚しただけで、家族による殺害が容認されている国すらあるそうです。そのために、年間数千人もの女性たちが殺されているというのです。その殺害を危うく免れたある女性は、少女時代の体験を次のように書いています。羊を放牧させている時に、うっかり寝込んでしまった時の出来事です。

> ある日、父は私の髪をつかんで地面に引きずり倒し、体じゅうを打ちつづけた。そして、引っこ抜かんばかりの勢いで三つ編みを引っ張ったかと思うと、羊毛を刈るハサミでばさっと切り落とした。髪の毛を失った私は叫びたいところをぐっと抑えた。泣けば、さらに足蹴りを食らうだけだ。私が悪かったのだ。あまりに暑かったせいで草地の日陰で姉と一緒に寝こんでしまい、羊たちを先に行かせてしまったのだ。〔中略〕
>
> 打っただけでは物足りなかったのか、姉のカイナとふたりで厩の柵に縛りつけられ、口には叫べないようにスカーフを押しこまれ、家畜とともに一夜を過ごしたこともあった。縛られて自由さえ奪われた私たちは、家畜以下の存在だった。〔中略〕父は専制君主であり、女たちを所有し、人生を決定し、拷問する絶対的な権力を持っていた。（スアド、二〇〇四年、二〇―二一ページ）

男尊女卑と呼ばれる現象は、今なお世界中で残っていますが、昔はこのようにはるかに過酷でした。

copyrighted material

子どもが過酷な扱いを受けていたという点は、西洋でも似たり寄ったりだったようで、たとえば、ヴィクトリア朝時代には、田舎の家庭の次男以下は、〝町〟のロンドンに丁稚奉公に出されたのです。ここでもやはり、衣食住が保障されるだけで満足していたわけで、給料などはもちろんありません。優秀な丁稚には暖簾分けがあったことも含めて、これは、わが国の年季奉公とほとんど同じものと考えていいようです。年齢的にも、わが国と大同小異でした。小池滋著『もうひとつのイギリス史』（中公新書）という本には、そうした事情が克明に描き出されています。

その本の中に、〝産業革命〟が始まって一〇〇年ほど経った一九世紀中頃（わが国の明治維新に近い頃）のロンドンを描いた、実に驚くべき版画が掲載されています。それは、ロンドンの「工場で支給される食料が少ないために付近の家畜の餌を盗み喰いする少年工員」たちの姿を写し取ったものです（小池、一九九一年、一六二ページ）。そこに描かれた少年たちは、一〇歳前後の子どものように見えます。しかし、わが国でも西洋でも、これらの子どもたちは、過酷な扱いを受けていたとはいえ、本章で問題にする意味での虐待を受けていたわけではありません。

その後、この産業革命が世界中に広がり、各国で都市化が進みます。その過程の中で、帝国主義による植民地支配が絶頂を迎えますが、それもふたつの世界大戦を経て崩壊の一途を辿ります。そして、わが国では、特に第二次大戦後に、人間としての上下の格差が次第に縮まってきます。敗戦のおかげで、経済的な発展だけを目指すことが可能になったからなのかもしれませんが、格差の縮小は、最近になるにつれて、ますます急速になってきたように見えます。

格差の縮小を端的に教えてくれる実例のひとつに、医師・患者関係の変化があります。一九七〇年代の初めに私は、ある中堅の医師から、次のような話を聞いたことがありました。一九六〇年頃、医学部

を卒業したばかりのその医師が、大学病院の皮膚科で研修を受けていた時、ひとりの患者が腕のほくろを取ってほしいと言って、診察室に入ってきました。診察した皮膚科教授は、「取ってあげるから安心しなさい」と告げて、すぐに患者を入院させたのだそうです。患者が診察室から出てゆくと、教授は、インターンたちに向かって説明しました。あの患者はほくろを取ってもらうつもりでいるが、明日の朝には、あの腕はない。ほくろは、たぶん悪性黒色腫だろう。転移のおそれがあるため、患部の細胞を採取して検査することはできない。まず、腕を切断する。それから細胞診をして悪性かどうか調べるのだ。

その話を、耳を疑いながら聞いていた私は、話してくれたその医師に、なぜ患者に説明をして、本人に決めさせないのか、もし悪性でなかったらどうするのか、と質問しました。すると、その場にいた別の中堅医師が、「患者にはそういう判断はできないので、医者が決めるのは当たりまえだよ」と発言したのです。現在なら、もしそのような医師の独断専行や傲岸不遜な態度が発覚すれば、即座に人権問題になり、担当医の責任が問われるばかりか、マスコミでも大々的に取りあげられ、大学病院全体の信用すら失墜しかねません。しかし、四〇年以上前には、そのような処置や対応が堂々とまかり通っており、患者側も、それに対応する形で〝小さく〟なっていたのです。あるいは、似たようなことは現在でもあるかもしれません。近藤誠さんの著書（たとえば、近藤、二〇〇三年）には、比較的最近にあったというその種の実例がたくさん出てくるからです。しかし、昔と違うのは、多くの患者が〝泣き寝入り〟しなくなったため、医師や病院側が患者の出かたをうかがって、戦々恐々としていることでしょう。

このような経過を見ても、社会的、経済的格差が、このところ急速に縮んできたことがはっきりわかります。それは、国民全体が高学歴になってきたことにも関係しているはずです。最近は、格差が再び広がってきていると言われていますが、経済的な側面に限定されていますし、それも、これまでの歴史

copyrighted material

の流れを考えれば、欧米を含めた他国に依然として残る階級に由来する旧来の格差とは、本質的に異なるもののように思われます[註2]。このようにして、有史以来、人類が夢見てきた理想の生活――第二次大戦以前なら、貴族の生活――にほぼ近い状況が、おそらく世界に先駆けて、わが国で社会全体として実現したわけです。

そして今や、さまざまな方面の被害者や社会的弱者の支援に力を注ぐ人たちが、ボランティアという形でたくさん出てきました。現在、マスコミでもごくふつうに語られるようになったＰＴＳＤという考えかたも、現代という時代背景の中から出てきたわけです。民衆が使い捨てにされていた時代を考えれば、まさに隔世の感があります。世界四大文明の時代には、おそらく九九パーセントの民衆が支配階層の意のままに動かされていたからです（鶴間他、二〇〇〇年、二一八ページ）。

現在では、たぶん一時的な揺り戻しが一部に起こっているとはいえ、ほとんどの家庭に、当時とは比較にならないほどの経済的余裕があるため、子どもに時間を割くことが、ごくふつうにできるようになりました。子どもに手をかけることもかけないことも、意のままに選べるようになったわけです。しかし、身売りに出すのはともかくとして、この恵まれた状況の中で、「かわいい子に旅をさせる」という選択肢をあえて取るのは、「心を鬼」にしない限りきわめて難しいはずです。

社会全体としての〝幼児化〟や権威の崩壊と並行して、前章でもふれた「世間体の崩壊」が起こりました。ベルクソンの言葉を使うと、現代のわが国は、外部の規範に依存する〈閉じた道徳〉が急速に崩壊し、各人の内にあるはずの〈開いた道徳〉へと移行する歴史的大転換点にある、ということになるかもしれません。外部の規範が崩れ去ったため、触法行為を別にすると、自分の行動を自分で律するしかなくなったのです。二千年前に書かれた聖書では、使徒パウロの言葉として、これを、「文字に従う古

い生き方ではなく、〝霊〟に従う新しい生き方」（「ローマの信徒への手紙」第七章六節）という言葉で表現しています。人類が進歩し、ようやくその段階が射程距離に入ってきたと考えるべきなのでしょう。

そのひとつの結果として、昔なら〝みっともない〟とされていた行動を平気で取る若者たちが急速に増え、それが社会問題にすらなってきました。また、従来的な犯罪が減少し、これまであまりなかった種類の犯罪が増えつつあります。それに対して、子どもたちに旧来の道徳を教え込むことで、〝秩序〟を取り戻そうと考える人たちがいます。しかし、老人の犯罪が増えているという事実や、以上のような歴史的経緯を冷静に見すえれば、子どもたちに古来の道徳を教えるという方法論――つまり、開いた道徳が要請される段階になってきているのに、既に崩壊した閉じた道徳を押しつけるというやりかた――は今後ますます機能しなくなるということが、はっきりわかるのではないでしょうか。これに固執するのは、歴史のみならず、人間の進化にも逆行する考えかたです。

このような歴史的背景の中で、いじめや子どもの虐待という問題が浮上するようになったわけです。この点を踏まえて考えないと、いじめや子どもの虐待を本当の意味で理解することはできないのではないでしょうか。

親しさと「いじめ」の関係

児童生徒のいじめ問題を、長年研究してきた教育評論家は、さまざまな調査結果を踏まえて、いじめが起こる状況について、次のように述べています。「いじめは、行きずりの電車内や街頭での『暴行・恐喝』や、いわゆる『オヤジ狩り』とはっきり区別できます。同一の集団の中でいじめが発生するという点がポイントです。〔中略〕本来の人間関係からいえば、あるべき友愛やいたわりや相互支持が逆転し、人

copyrighted material